RE:01 ― 戦姫絶臭 ―

「観念するんだ雪音クリス」
「そうだよクリスちゃん 大人しくしようねぇ」
「やめろ二人とも！ いったいどうしたんだ?!
なんでこんなコト?!
それより何より誰だよこのオッサン!!」
ギュッ
グイ…
やあ！ はじめましてクリスちゃん！
そう 何を隠そう私こそが 恥丘の・・・いや
地球の平和を守るため 悪と戦うスペルマンだっ!!

「知らねぇよ！　誰だよ?!　何なんだよ?!」
安心したまえクリスちゃん！　何も心配するコトはない！
クリスちゃんは大人しくその身をゆだねてくれるだけで良いんだ
あとは私が良きところで撒き散らして終了！
簡単なお仕事だ！
「はぁ?!　何だよそれ?!　撒き散らすって何だよ?!　何をだよ?!」

クリスちゃんがリラックスできるようにと
響ちゃんと翼ちゃんにもお手伝いをお願いしたんだ
二人ともずっとクリスちゃんのニオイに興味津々だったようだからね

「何の手伝いだよ?! ニオイ?! てか撒き散らすって何だよ?!」

大丈夫! クリスちゃんの恥丘の平和は私が守る!
さぁ いってみようか!!
「だから撒き散らすって何だよ?! 何を撒き散らすんだよ?!
おいコラっ! 聞けよテメェ!!」

「にしてもクリスちゃんのおっぱい・・・すごいねぇ・・・」
「ちょっ・・・このバカ!! 揉むな! やめろっ!」
「まったくだ・・・何をどうしたらそんなコトになるんだ」
うむむ
「小さい頃から色々な大人たちに揉まれ続けて来たからかなぁ」
「知るかバカっ! 早く放しやがれっ!」
くっ
はぁ
「へへっ 放しませんよぉ
これからいっぱいクリスちゃんと遊ぶんだから
ではでは まずはここから行こうかクリスちゃん」
むにぃ

「あはっ　腋汗がいっぱい・・・それにすごいニオイだね」
「なっ！　なんてコト言いやがる・・・やめろ嗅ぐなっ！」
「剃り跡も・・・女の子なんだからちゃんと処理しないと」
「そうだぞ雪音　そんなけしからん汚腋は
私達が舐めてキレイキレイしてやるっ！」
「なめ・・・っ？」
じゅっ
じゅっ
ごくり
じとー

「うぐっ　ものすごい塩気だな　酸味もハンパない」
「バカっ！　舐めるなっ！　やめてくれっ！　はぁうっ！」
「どうした？　感じているのか？
腋を舐められて感じているのか？」
「そっ　そんなわけないだろ！」
「ふっ　嘘をつくな
フィーネに身体の色々な部分を
性感帯に改造されているのは知っているぞ」
「そ・・・それは・・・はぁっ！」
「翼さんの責めに反応してクリスちゃんの腋汁がどんどん溢れてくる
ニオイもどんどん濃くなって・・・スゴイ・・・」
ビクッ
あっ
ストロオオ
ベロン

「はぁ　臭いよ・・・すごく臭いよクリスちゃん・・・」
「なぁ・・・オイ・・・・・・
そんなに・・・あたしはそんなに・・・臭い・・・のか？」
「そうだよクリスちゃん　クリスちゃんは臭いんだよ
いつもクリスちゃんのニオイで戦闘に集中できないくらい臭いよ
ニオイの　めがですぱーりぃーだよ！」
「あぁ　とてつもなく臭いぞ雪音クリス　臭いぞ　臭いぞ！
ちゃんと洗っているのか？」
もみもみ
ぺろぺろ
ぴちゃ
ぴりっ
ぴりっ

「あら・・・う？　洗うのかっ?!」
「まさかクリスちゃん洗ってないの?!」
「そんな・・・だってずっと・・・あの頃の・・・あの大人達だって
フィーネだって腋と足と汚股は洗っちゃダメだって・・・違うのか?!」
「そのとおおおりだよクリスちゃん!!
洗っちゃいけないよ！　洗うのダメ絶対！」
「本当に?!　本当に大丈夫なんだな?!」
ビクッ
はっ
ぺろ
ぷちゅ
ぴちゅ
ソイ
フィ
はっ

『本当だよ！　最高だよクリスちゃん！』
「あぁ　そのとおりだ！　味も香りも最高に仕上がってるぞ！
これは私の舌も止まらない！」
「あぁっ　もうやめてくれっ・・・これ以上されたら・・・んんっ！」
ヒクヒクッ！　ビクッヒクヒクッ!!
ビクッ
ピクッ
ヒクヒクッ
ヒクヒク
ベロベロ
ビクッ
「イクのか？　イってしまうのか？
腋を舐められてイってしまうのか？
イケっ！　イクがいい！　私に腋を舐められてイクがいい!!」
「あぁっ　ダメだ・・・もう・・・我慢できないっ!!」
「我慢しないでイっちゃえクリスちゃん!!」

「あああああっ イクううううっ!!」
ビクビクビクビクビクビクッ!!
ビクぴくビクンッ!!
ビカビカビカビカ
ビリン
ビクン
ビクン
ビクン
ハァ〜ハァ〜
私もそろそろ良きところおおおっ!!
恥丘の平和は守ってみせるうっ!!

「なっ・・・なにをっ・・・ひっ!!」
へあっ!!
ビュビュ
ビュルルル
ビュルビュルル
ビュッビュッ
ビュビュ
「んんうっ・・・うあっ・・・むぐう・・・」

「イっちゃたねぇクリスちゃん
腋舐められて気持ち良かったんだねぇ」
「それにいっぱい撒き散らしてもらえたねぇ
臭いねぇ 良かったねぇ」
ちゃんと撒き散らしておかないと恥丘の平和が守れないのでねっ！
「バカ・・・やろう・・・何も良いコトなんか・・・ねぇ・・・うぅっ・・・
くせぇ・・・やっぱりこのニオイは嫌いだ・・・」
「まだ終わらんぞ雪音!!」
ハァ
ハァ
ハァ

「次はいつもタイツでムレムレのこの足だ！」
「ちょっ　何してやがる！　そこも・・・あたしは足も臭いんだっ！」
「あぁ　知っているさ　いつもいつも女子校生にあるまじき危険すぎる恥香を放っていることはな！
だから腋同様　この足も私がキレイキレイしてやるっ！」

「先輩・・・いったいどうしちまったんだよ！」
なんでこんな・・・もうやめてくれよ・・・」
あぁ
はぁ
「どうもしてはいないさ
いつもお前の足から漂ってくるこの芳香を嗅ぐ度に
ずっとこうしてやりたいと思っていたのだ
はっ
それにしてもこのニオイ・・・ウッ・・・
むぁっ
まるで納豆のようだ　足納豆だな
こんなに臭い足納豆はすぐに私が
お口で美味しくキレイキレイに・・・
・・・べろっ」
スンスン
「ちょっ！　舐めるなっ！」
スンスン
スンスン

「あぁ　雪音の足納豆は塩がきいてとても美味いぞ」
「んぁっ　うまい・・・って・・・そんな・・・んはっ・・・そこは！」
「特にこの指と指の間が・・・んれろれろっ」
ここは汗も汚れも溜まりやすいからな
味もニオイも一際濃いぞ」
「んっ・・・そこはダメだ・・・ダメなんだ」
「ふふっ　知っているぞ　ここが感じるのだろう？
遠慮しないで存分に感じるがいい
さあ　もっとしっかり指を開け
こんなけしからん汚御足は
味がしなくなるまでねっぷりと
しゃぶりつくしてくれるわ！」

ピクッ
あぁ
はぁ
はぁ
はぁ
ピクン
はぁ
ぴちゃ
れろ
れろ
ぺろぺろ
ぴちゃ
ぴちゃ

「爪と皮膚の間や指の又に溜まった最早何かも分からなくなった汚物・・・
噛めば噛むほど脳髄に突き刺さる程の汚臭と汚汁が湧き出してくるっ！
これぞまさに至高の珍味！」

「バカやろうっ！そんなモン食ってんじゃねぇ！」
「バカはお前だ雪音！コレを喰らわずして何が防人か！」
「意味わかんねぇよ！お前の防人感どうなってんだよっ！」
「ふっ　分かっているぞ　そんなコトを言って気を逸らそうとしても無駄だ
もう限界だと先ほどから身体の反応が語っているぞ
だからといって私がこの汚食事の手を緩めるコトはないがなっ！」

はっ
はっ
トロォォ
ヤバ
ヤバ

「さあイケっ！
己が新陳代謝で生み出した臭悪な汚物を喰らわれながら
絶頂しろっ！」

『やめてくれっ！もう食べないでくれっ！汚食事をやめてくれ！』
『そら　諦めて大人しくイケっ！　イケっ　イケっ　イケっ!!
汚食事でイケっ！　絶頂しろっ　雪音クリスっ!!』

「イクうう！　汚食事でイクうううう!!
ひぐうううううんんんんんんうううう!!」

ビクン

ビクビクビク

ビクッ
はぁ
あぁ
あっ
あぁ
ビチャ
ビチャ
ビュルル
ビュルル
ビュルル
ビュルル
ビュルル
ビュルル

「たいへん美味しゅうございましたぁ！」
「また・・・またこんな・・・臭い汚汁でドロドロに・・・」
もう少し！もう少しだクリスちゃん！
もう少しでクリスちゃんの恥丘の平和が守れそうだ！

ピクン
はぁ
ピクン
はぁ
ビクン
はぁ
ビクッ
はぁ
ビクン
はぁ
ビクン
ビクッ
ドロオオオオ
ドロドロオ
ビクビクブルル
ビク

ビクッ
「それじゃあクリスちゃん私もいくよっ！
いよいよ僕らの宇宙船恥丘号に乗り込むよ！」
「なっ！ バカやろう！ そこはダメだ！ 絶対ダメだ！」
ゲゲッ
Z
「何言ってるのクリスちゃん 洗ってない恥丘がどうなってるのか
恥丘の平和のためにも確認しないとだよ」
「どうもなってねぇよ！ ちょっと汚れてるかもしんねぇけど
問題無いって！」

「あはっ　クリスちゃん　パンツにシミができてるよぉ　臭そぉ」
「やめろ！　見るな！　見ないでくれ！」
「洗ってないクリスちゃんの汚マ○コから染み出たアレやコレを全部このパンツさんが受け止めてくれたんだねえ」

じわっ
しみしみ
あぁ
もわ
もわ

「やめろよ・・・な？　もうやめてくれよ・・・」

「仲間だと思ってたやつらにこんなコトされて・・・
臭いニオイいっぱい嗅がれて・・・
次からどんな顔して会えばいいってんだよ・・・」

「大丈夫だよクリスちゃん！
こんな臭いニオイも乗り越えてこその仲間だよ！
こんなに臭いクリスちゃんだって大事な仲間なんだよ！」

「お・・・おまえ・・・」

「だから大事な仲間の汚臭を胸いっぱい吸い込ませてねっ！」

「あっコラっ・・・やめっ・・・っ！」

「うはっ！　汗やおしっこにクリス汁まで混じって
涙が出てくるレベルの刺激臭が！」

あっ　ぬるぬるっ　あぁ

「やっぱりこれは危険すぎるよクリスちゃん！」

「分かった・・・もう分かったから・・・
あんまり言わないでくれよ・・・
く・・・臭いって言われんの恥ずかしいんだからな！」

「恥じるコトなんてないよ！
美少女の汚臭はステータスなんだよ！」

「それでも臭いモノは臭いんだろ？」

「そうだよ　とてつもなく臭いよ！
異臭騒ぎで通報されるレベルだよ！
でもクリスちゃんの汚臭なら
へいき、へっちゃら　だよっ!!」

「バカ・・・やろう・・・」

「うーん　そうだとしても臭すぎるのは確かだね
これはどうなってるのか直接確かめるしかないかな」

「直接って・・・ひっ」

ハーハー　ハーハー　ハーハー

「うわぁ・・・これは想像以上に酷い状態だね・・・
汗とおしっことクリス汁だけかと思ったら
ドロドロおりものまでびっちりだよ・・・
マンカスも溜まり放題溜まってるね」
「バカっ！　見るな見るなっ！」
「大丈夫　すぐにキレイにしてあげるねっ
いっただきまーす!!」
ぐちゅ
ぐぢゅぢゅ
ぢゅぢゅ
ぢゅぢゅ

「ひぐうっ!!」
「あぁスゴイ・・・汚汁とオリモノが混ざってもうドロドロ・・・
マンカスもその食感で主張してくる
まるでクリームシチューみたい」
「クリスちゃん美味しいよ! 汚食事の用意が整いすぎだよ!」
「あぁ・・・また・・・食べられ・・・てる・・・あたしの排出した汚物で
・・・汚食事されて・・・る・・・う」

「この汚物の汚食事はみんな
クリスちゃんが作ったんだよ！」
「汚汁もおしっこも汗もマンカスもオリモノも
みんなみんなクリスちゃんの身体の中で
自ら生産し出荷したモノなんだよ！
これはもうクリスちゃんそのものといっても過言じゃないよ！
私は今クリスちゃんを食べてるんだよ！
美味しいよクリスちゃん!!」
「やめてくれ・・・食べないでくれ・・・
もうこれ以上あたしを食べないでくれぇ!!」
ぢゅ
ぢゅ
ぢゅ

「もうそのくらいでいいだろ？　な？
それ以上食ったら腹壊しちまうぞ？」
「どうしたの？　まだまだキレイにしないとだよ？」
「お願いだ・・・止めてくれ・・・じゃないともう・・・うくっ」
「じゃないと？　じゃないとなに？」
「う・・・うるせぇバカ！
なんでも・・・ねぇ・・・よっ！」
「へへっ　ごめんねクリスちゃん
分かってるよ　イっちゃいそうなんだよね」
「いいんだよ　イっちゃっていいんだよ
私の汚ま◎こ汚掃除クンニでイっちゃっていいんだよ!!」
「くっ・・・そ・・・あぁっ・・・もう・・・ダメだ・・・いっ・・・いっ！」

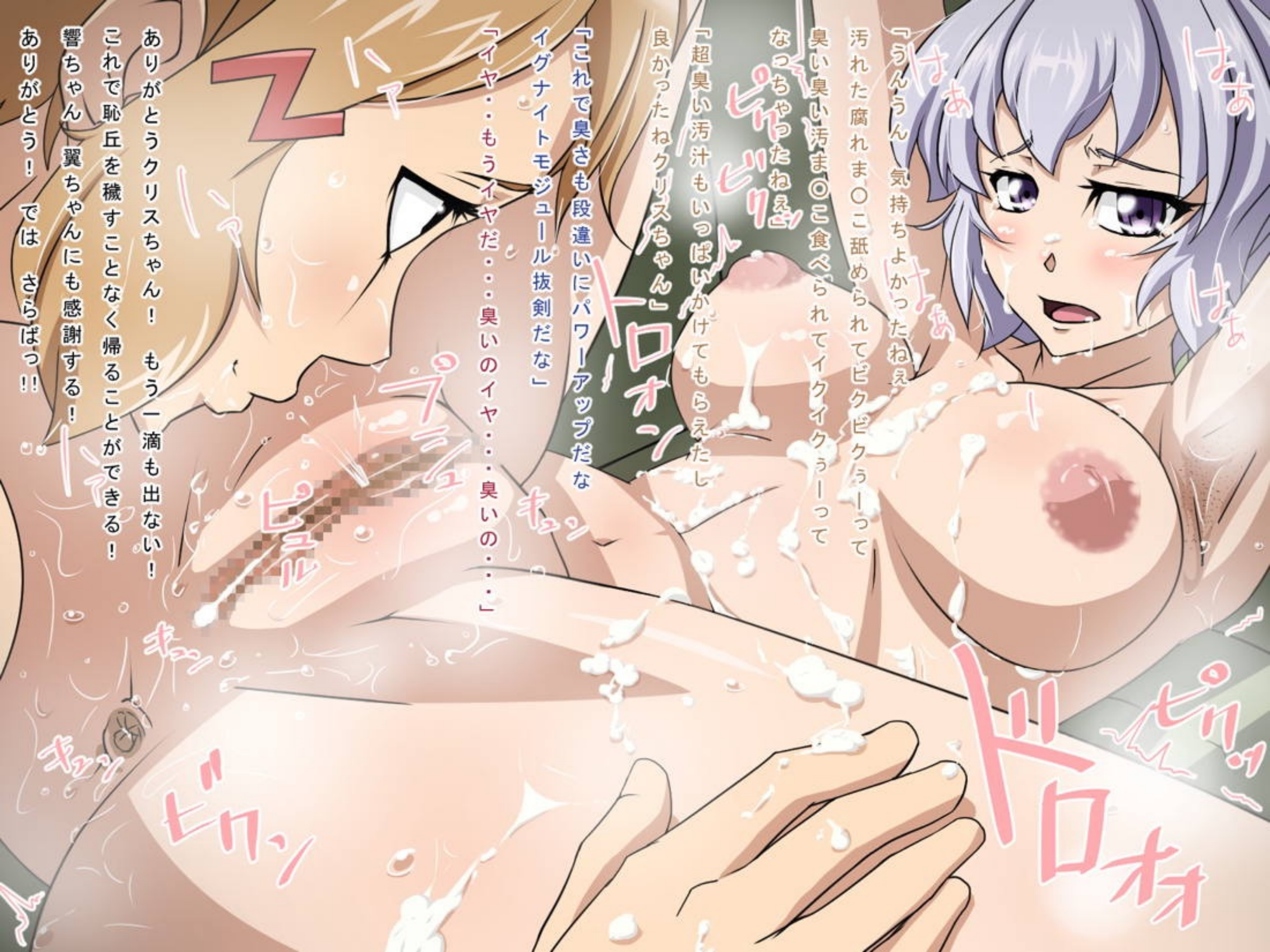
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ヒクヒク
ヒクヒク
ヒクヒク
ヒクヒク
ビチュ
ビチュ
ビチュ

「あぁっ　いっ・・・いっぐぅううっ!!」

「あぁっスゴイスゴイ！　スゴイよクリスちゃん！
くっさい汚潮が噴き出してきたよ！
くっさい汚潮のシャワーが止まらないよっ！」

ビクッ
ビクッ
ビクッ

これでおしまいっ!!
ビクン
ビクン
ビクン


「うんうん 気持ちよかったねぇ
汚れた腐れま○こ舐められてビクビクぅーって
臭い臭い汚ま○こ食べられてイクイクぅーって
なっちゃったねぇ」
「超臭い汚汁もいっぱいかけてもらえたし
良かったねクリスちゃん」
「これで臭さも段違いにパワーアップだな
イグナイトモジュール抜剣だな」
「イヤ・・もうイヤだ・・・臭いのイヤ・・・臭いの・・・・」
ありがとうクリスちゃん！ もう一滴も出ない！
これで恥丘を穢すことなく帰ることができる！
響ちゃん 翼ちゃんにも感謝する！
ありがとう！ では さらばっ!!
はぁ
はぁ
はぁ
ピクッ
ビクッ
トロォン
トロォン
ピュル
キュン
キュン
キュン
ビクン
ピッ

「なんだ？　だんだん・・・あのオッサン・・・」

「おっかな　誰のリンゴ」

「はあ？　今いたオッサンのリンゴだー」

「何を言っている　リリエはずっと私たち3人しかいなかっただろう」

「そうだも　変なクリスちゃん」

「お前たちリを何言って・・・」

「それもクリスちゃん・・・面々から面から面ってこり盗ってたんだよ・・・
母々面ら田ノ難ンて・・・あの」

「ああん？」

「その・・・クリスちゃん言ってたもね・・・」

「はあ？　それはもっと散々聞いたぞ
ずっと洗ってないんだからノもうがねえだろ　洗わなくていいんだろ？」

「え？　洗ってない・・・ずっと？」

「洗ってないだと？！　バカ者！！　何を考えている？！」

「何をって・・・はあ？」

「クリスちゃんがそんな汚穢様だったなんて・・・
ミルクドサや酸ぬたらな豪相言を反逆謀ンしたらな無言を投って
いつも近寄られるそはドオロ出ものならい言かったのはそのせいか」

「その様子だと深みはいた言いは洗ってもノはらンは取れそうにないな」

「ちゃんと人様ノっら言ってになるまで結婚から出て！なんでンれるかな
そんな汚言を無き散らかノて外歩かれると迷惑なんだもね」

「回感だ　人類の平和は私たちで守る　貴様のような汚物女は必要ない」

「な？・・・なんで・・・」

「シャ　そっちのコトドもっノン　れもなのクリスちゃん」

「？・・・

ブイ…
ギュッ

はぁ～
くっ
うむむ
だいてぃ

じゅぱ
じゅぷ
じゅぷー

ドクーン
あっ
ズズッ
トロォォ
ベロン

もみもみ
ハァ
ハァ
ハァ
ハァ
ハァ
ぷにっ
ぴちゃ
ぴちゃ
ぴり
ぴり
レロレロ

ビクッ
はぁ
ぺロ
ぺロ
ぴちゃ
ぴちゃ
ぴちゃ

ピク
ヒクヒク
ビク
ヒクヒク
ビク

ハァ
ハァ
ビクン
ビクン
ビクン

ビュビュッ
ビュビュッ
ビュビュビュ

ハァ
ハァ
ハァ

ブッ
ちょっ
なっ
むあぁ
じとぉ

ズーン
ズンズン
ズンズン
むぁっ
はぁ
はっ
はぁ
あぁっ

はぁ
はぁ
ピチャ
レロ
ペロォォ
チュプ
レロ
チュプ
ん、
ヒクッ
あ、
はぁ
はぁ
ピクン
あぁ

なっ
はっ
はっ
ドロォォ
ドチャ
ドチュ

あ、
ビカーン
はっ
はなっ
ビクンッ
あぁ
ピチャ
ベロオ
ピチャ
クチャ
ベロ
ベロ

ビクンビクンビクン

ビクッ
はぁ
あぁ
あっ
あぁ
ビチャ
ビチャ
ビュルル
ビュルル
ビュルル
ビュルル
ビュルル
ビュルル

ピクンッ
はぁ
はぁ
ピクンッ
はぁ
はぁ
ビクンッ
ドロオオオオ
ビクビクッ
ドロロロオ
ビク

Z
ハァ
ハァ
ハァ
ハァ
ゲンッ
グッ
グッ

じわっ
しみしみ
もみあああ
もわ
もわ

Z
ハァ
ハァ
ハァ
くっ
ん
ブルブル
ブルブル
ブルブル

Zパスト
ビクッ
スーパーパー
あっ
うるうる
んっ
あぁ

Z
ハァ
ハァ
ハァ
ブッチョリ
ちゅぱ
ぁぁ
ぁぁ
ぁぁ

ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ああ
はっ
はっ
はっ
はっ
はっ
ズブッ
ズブッ
ズブッ

ハァ
ハァ
ハァ
んぐっ
んぐ
ジュル
ジュル
ジュル
ジュル
ビクン
はぁ
はぁ
はぁ

ハァ
ハァ
ハァ
ビクッ
ビクッ
ビクッ

Z
ビクッ
はっ
あ
ビクッ
ビクッ
ビクッ

Z
ビクン
ビクン
ビクン

ハァ
ハァ
ピクッ
ビクッ
トロォン
はぁ
はぁ
はぁ
はぁ
プラ
ピュル
ピュル
キュン
キュン
キュン
ビクン
ドロォ
ピッ

Z

Z

Z

Z

Z

Z

Z

Z

Z

Z

Z

「観念するんだ雪音クリス」
「そうだよクリスちゃん 大人しくしようねぇ」
「やめろ二人とも！ いったいどうしたんだ?!
なんでこんなコト?!
それより何より誰だよこのオッサン!!」
ギュッ
グイ…
やあ！ はじめましてクリスちゃん！
そう 何を隠そう私こそが 恥丘の・・・いや
地球の平和を守るため 悪と戦うスペルマンだっ!!

「知らねぇよ！　誰だよ?!　何なんだよ?!」
安心したまえクリスちゃん！　何も心配するコトはない！
クリスちゃんは大人しくその身をゆだねてくれるだけで良いんだ
あとは私が良きところで撒き散らして終了！
簡単なお仕事だ！
「はぁ?!　何だよそれ?!　撒き散らすって何だよ?!　何をだよ?!」

クリスちゃんがリラックスできるようにと
響ちゃんと翼ちゃんにもお手伝いをお願いしたんだ
二人ともずっとクリスちゃんのニオイに興味津々だったようだからね

「何の手伝いだよ?! ニオイ?! てか撒き散らすって何だよ?!」

大丈夫! クリスちゃんの恥丘の平和は私が守る!
さぁ いってみようか!!
「だから撒き散らすって何だよ?! 何を撒き散らすんだよ?!
おいコラっ! 聞けよテメェ!!」

「にしてもクリスちゃんのおっぱい・・・すごいねぇ・・・」
「ちょっ・・・このバカ!! 揉むな! やめろっ!」
「まったくだ・・・何をどうしたらそんなコトになるんだ」
うむむ
「小さい頃から色々な大人たちに揉まれ続けて来たからかなぁ」
「知るかバカっ! 早く放しやがれっ!」
くっ
はぁ
「へへっ 放しませんよぉ
これからいっぱいクリスちゃんと遊ぶんだから
ではでは まずはここから行こうかクリスちゃん」
むにぃ

「あはっ　腋汗がいっぱい・・・それにすごいニオイだね」
「なっ！　なんてコト言いやがる・・・やめろ嗅ぐなっ！」
「剃り跡も・・・女の子なんだからちゃんと処理しないと」
「そうだぞ雪音　そんなけしからん汚腋は
私達が舐めてキレイキレイしてやるっ！」
「なめ・・・っ？」
じゅっ
じとー

「うぐっ　ものすごい塩気だな　酸味もハンパない」
「バカっ！　舐めるなっ！　やめてくれっ！　はぁうっ！」
「どうした？　感じているのか？
腋を舐められて感じているのか？」
「そっ　そんなわけないだろ！」
「ふっ　嘘をつくな
フィーネに身体の色々な部分を
性感帯に改造されているのは知っているぞ」
「そ・・・それは・・・はぁっ！」
「翼さんの責めに反応してクリスちゃんの腋汁がどんどん溢れてくる
ニオイもどんどん濃くなって・・・スゴイ・・・」
ビクッ
あっ
ストロオオ
ベロン

「はぁ　臭いよ・・・すごく臭いよクリスちゃん・・・」
「なぁ・・・オイ・・・・・・
そんなに・・・あたしはそんなに・・・臭い・・・のか？」
「そうだよクリスちゃん　クリスちゃんは臭いんだよ
いつもクリスちゃんのニオイで戦闘に集中できないくらい臭いよ
ニオイの　めがですぱーりぃーだよ！」
「あぁ　とてつもなく臭いぞ雪音クリス　臭いぞ　臭いぞ！
ちゃんと洗っているのか？」
もみもみ
ぴちゃ
くちゅ
ぺろ
ぴり
ぴり

「あら・・・う？　洗うのかっ?!」
「まさかクリスちゃん洗ってないの?!」
「そんな・・・だってずっと・・・あの頃の・・・あの大人達だって
フィーネだって腋と足と汚股は洗っちゃダメだって・・・違うのか?!」
「そのとおおおりだよクリスちゃん!!
洗っちゃいけないよ！　洗うのダメ絶対！」
「本当に?!　本当に大丈夫なんだな?!」
ビクッ
はっ
ぺロ
ぷちゅ
ぴちゅ
ソガ・・・ブガ
ぺロ
はっ

『本当だよ！　最高だよクリスちゃん！』
「あぁ　そのとおりだ！　味も香りも最高に仕上がってるぞ！
これは私の舌も止まらない！」
「あぁっ　もうやめてくれっ・・・これ以上されたら・・・んんっ！」
ヒクヒクッ！　ビクッヒクヒクッ!!
ピクッ
ビクッ
ヒクヒクッ
ヒクヒク
ベロンベロン
ビクッ
「イクのか？　イってしまうのか？
腋を舐められてイってしまうのか？
イケっ！　イクがいい！　私に腋を舐められてイクがいい!!」
「あぁっ　ダメだ・・・もう・・・我慢できないっ!!」
「我慢しないでイっちゃえクリスちゃん!!」

「あああああっ イクううううっ!!」
ビクビクビクビクビクビクッ!!
ビクぴくビクンッ!!
ビカビカビカビカ
ビリン
ビクン
ビクン
ビクン
ハァ〜ハァ〜
私もそろそろ良きところおおおっ!!
恥丘の平和は守ってみせるうっ!!

「なっ・・・なにをっ・・・ひっ!!」
へあっ!!
ビュビュ
ビュルルル
ビュルビュルル
ビュッビュッ
ビュビュ
「んんうっ・・・うあっ・・・むぐう・・・」

「イっちゃたねぇクリスちゃん
腋舐められて気持ち良かったんだねぇ」
「それにいっぱい撒き散らしてもらえたねぇ
臭いねぇ 良かったねぇ」
ちゃんと撒き散らしておかないと恥丘の平和が守れないのでねっ！
「バカ・・・やろう・・・何も良いコトなんか・・・ねぇ・・・うぅっ・・・
くせぇ・・・やっぱりこのニオイは嫌いだ・・・」
「まだ終わらんぞ雪音!!」
ハァ
ハァ
ハァ

「次はいつもタイツでムレムレのこの足だ！」
「ちょっ　何してやがる！　そこも・・・あたしは足も臭いんだっ！」
「あぁ　知っているさ　いつもいつも女子校生にあるまじき危険すぎる恥香を放っていることはな！
だから腋同様　この足も私がキレイキレイしてやるっ！」

「先輩・・・いったいどうしちまったんだよ！」
なんでこんな・・・もうやめてくれよ・・・」
あぁ
はぁ
「どうもしてはいないさ
いつもお前の足から漂ってくるこの芳香を嗅ぐ度に
ずっとこうしてやりたいと思っていたのだ
はっ
それにしてもこのニオイ・・・ウッ・・・
むぁっ
まるで納豆のようだ　足納豆だな
こんなに臭い足納豆はすぐに私が
お口で美味しくキレイキレイに・・・
・・・べろっ」
スンスン
「ちょっ！　舐めるなっ！」
スンスン
スンスン

「あぁ　雪音の足納豆は塩がきいてとても美味いぞ」
「んぁっ　うまい・・・って・・・そんな・・・んはっ・・・そこは！」
「特にこの指と指の間が・・・んれろれろっ」
ここは汗も汚れも溜まりやすいからな
味もニオイも一際濃いぞ」
「んっ・・・そこはダメだ・・・ダメなんだ」
「ふふっ　知っているぞ　ここが感じるのだろう？
遠慮しないで存分に感じるがいい
さあ　もっとしっかり指を開け
こんなけしからん汚御足は
味がしなくなるまでねっぷりと
しゃぶりつくしてくれるわ！」

ピクッ
あぁ
はぁ
はぁ
はぁ
ピクン
はぁ
ぴちゃ
れろ
れろ
ぺろぺろ
ぴちゃ
ぴちゃ

「爪と皮膚の間や指の又に溜まった最早何かも分からなくなった汚物・・・
噛めば噛むほど脳髄に突き刺さる程の汚臭と汚汁が湧き出してくるっ！
これぞまさに至高の珍味！」

「バカやろうっ！そんなモン食ってんじゃねぇ！」
「バカはお前だ雪音！コレを喰らわずして何が防人か！」
「意味わかんねぇよ！お前の防人感どうなってんだよっ！」
「ふっ　分かっているぞ　そんなコトを言って気を逸らそうとしても無駄だ
もう限界だと先ほどから身体の反応が語っているぞ
だからといって私がこの汚食事の手を緩めるコトはないがなっ！」

はっ
はっ
トロォォ
ヤバ
ヤバ

「さあイケっ！
己が新陳代謝で生み出した臭悪な汚物を喰らわれながら
絶頂しろっ！」

『やめてくれっ！ もう食べないでくれっ！ 汚食事をやめてくれ！』
『そら 諦めて大人しくイケっ！ イケっ イケっ イケっ!!
汚食事でイケっ！ 絶頂しろっ 雪音クリスっ!!』

「イクうっ！　汚食事でイクうううっ!!
ひぐうううううんんんんんんんうううう!!」

ビクン

ビクビクビク

ビクッ
はぁ
あぁ
あっ
ぁぁ
ビュビュビュ

「たいへん美味しゅうございましたぁ！」
「また・・・またこんな・・・臭い汚汁でドロドロに・・・」
もう少し！もう少しだクリスちゃん！
もう少しでクリスちゃんの恥丘の平和が守れそうだ！

ピクン
はぁ
ピクン
はぁ
ビクン
はぁ
ビクッ
はぁ
ビクン
はぁ
ビクン
はぁ
ビクン

ビクッ

「それじゃあクリスちゃん私もいくよっ！
いよいよ僕らの宇宙船恥丘号に乗り込むよ！」
「なっ！　バカやろう！　そこはダメだ！　絶対ダメだ！」

ゲゲッ

Z

「何言ってるのクリスちゃん　洗ってない恥丘がどうなってるのか
恥丘の平和のためにも確認しないとだよ」
「どうもなってねぇよ！　ちょっと汚れてるかもしんねぇけど
問題無いって！」

「あはっ　クリスちゃん　パンツにシミができてるよぉ　臭そぉ」
「やめろ！　見るな！　見ないでくれ！」
「洗ってないクリスちゃんの汚マ○コから染み出たアレやコレを全部このパンツさんが受け止めてくれたんだねえ」

じわっ
しみしみ
あぁ
もわ
もわ

「やめろよ・・・な？　もうやめてくれよ・・・」

「仲間だと思ってたやつらにこんなコトされて・・・
臭いニオイいっぱい嗅がれて・・・
次からどんな顔して会えばいいってんだよ・・・」

「大丈夫だよクリスちゃん！
こんな臭いニオイも乗り越えてこその仲間だよ！
こんなに臭いクリスちゃんだって大事な仲間なんだよ！」

「お・・・おまえ・・・」

「だから大事な仲間の汚臭を胸いっぱい吸い込ませてねっ！」

「あっコラっ・・・やめっ・・・っ！」

「うはっ！　汗やおしっこにクリス汁まで混じって
涙が出てくるレベルの刺激臭が！」

「やっぱりこれは危険すぎるよクリスちゃん！」

「分かった・・・もう分かったから・・・
あんまり言わないでくれよ・・・
く・・・臭いって言われんの恥ずかしいんだからな！」

「恥じるコトなんてないよ！
美少女の汚臭はステータスなんだよ！」

「それでも臭いモノは臭いんだろ？」

「そうだよ　とてつもなく臭いよ！
異臭騒ぎで通報されるレベルだよ！
でもクリスちゃんの汚臭なら
へいき、へっちゃら　だよっ!!」

「バカ・・・やろう・・・」

「うーん　そうだとしても臭すぎるのは確かだね
これはどうなってるのか直接確かめるしかないかな」

「直接って・・・ひっ」

あっ

ぬるぬるっ

あ

ハーハー

ハーハー

ハーハー

「うわぁ・・・これは想像以上に酷い状態だね・・・
汗とおしっことクリス汁だけかと思ったら
ドロドロおりものまでびっちりだよ・・・
マンカスも溜まり放題溜まってるね」
「バカっ！　見るな見るなっ！」
「大丈夫　すぐにキレイにしてあげるねっ
いっただきまーす!!」
ぐちゅり
ぐぢゅぢゅ
ぢゅぢゅ
ぢゅぢゅ

「ひぐうっ!!」
「あぁスゴイ・・・汚汁とオリモノが混ざってもうドロドロ・・・
マンカスもその食感で主張してくる
まるでクリームシチューみたい」
「クリスちゃん美味しいよ! 汚食事の用意が整いすぎだよ!」
「あぁ・・・また・・・食べられ・・・てる・・・あたしの排出した汚物で
・・・汚食事されて・・・る・・・う」

「この汚物の汚食事はみんな
クリスちゃんが作ったんだよ！」
「汚汁もおしっこも汗もマンカスもオリモノも
みんなみんなクリスちゃんの身体の中で
自ら生産し出荷したモノなんだよ！
これはもうクリスちゃんそのものといっても過言じゃないよ！
私は今クリスちゃんを食べてるんだよ！
美味しいよクリスちゃん!!」
「やめてくれ・・・食べないでくれ・・・
もうこれ以上あたしを食べないでくれぇ!!」
ぢゅ
ぢゅ
ぢゅ

「もうそのくらいでいいだろ？　な？
それ以上食ったら腹壊しちまうぞ？」
「どうしたの？　まだまだキレイにしないとだよ？」
「お願いだ・・・止めてくれ・・・じゃないともう・・・うくっ」
「じゃないと？　じゃないとなに？」
「う・・・うるせぇバカ！
なんでも・・・ねぇ・・・よっ！」
「へへっ　ごめんねクリスちゃん
分かってるよ　イっちゃいそうなんだよね」
「いいんだよ　イっちゃっていいんだよ
私の汚ま◎こ汚掃除クンニでイっちゃっていいんだよ!!」
「くっ・・・そ・・・あぁっ・・・もう・・・ダメだ・・・いっ・・・いっ！」

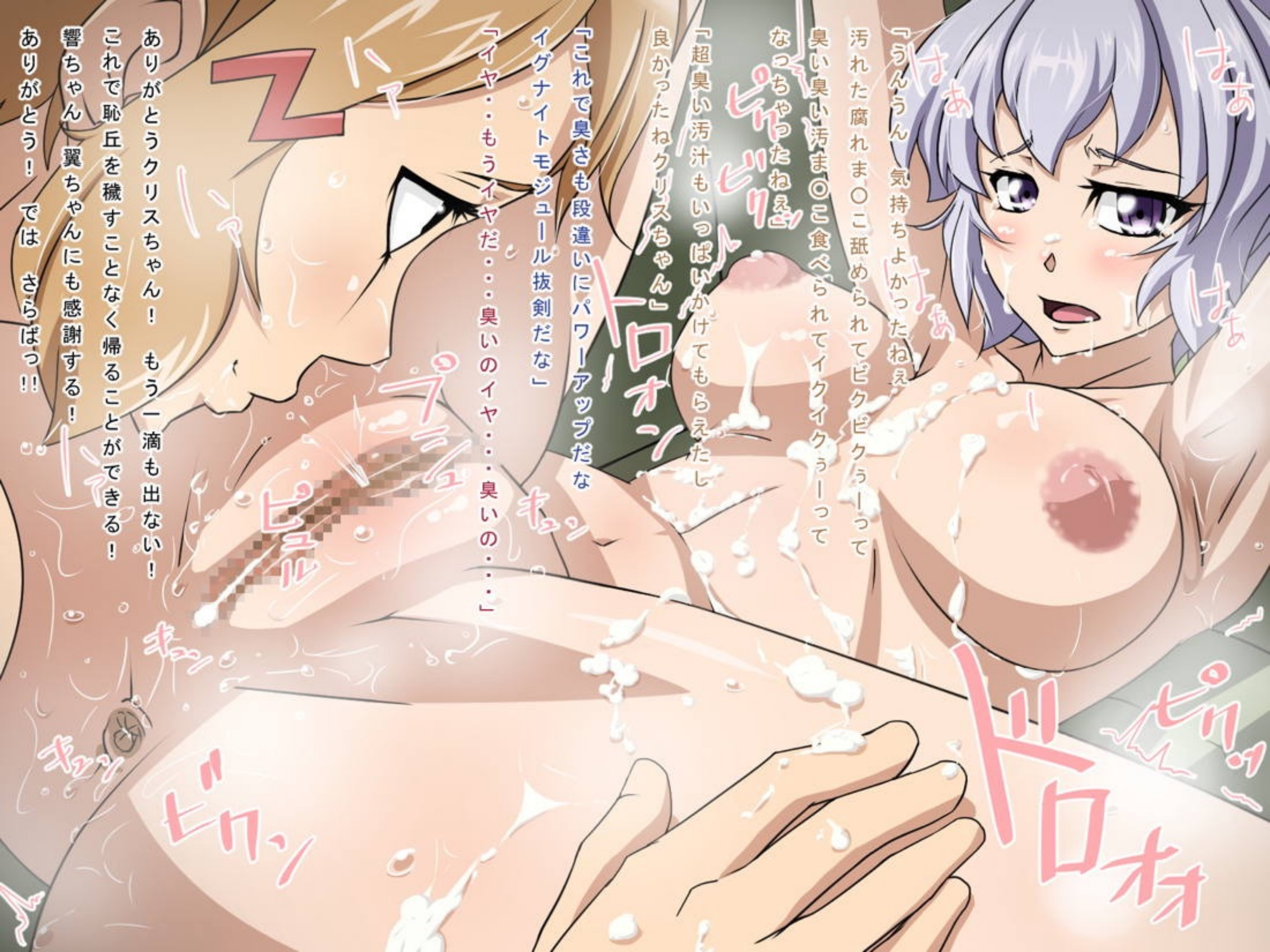
ビクッ
ビクッ
ビクッ

「あぁっ　いっ・・・いっぐぅううっ!!」

「あぁっスゴイスゴイ！　スゴイよクリスちゃん！
くっさい汚潮が噴き出してきたよ！
くっさい汚潮のシャワーが止まらないよっ！」

ビクッ
ビクッ
ビクッ

これでおしまいっ!!
ビクン
ビクン
ビクン


「うんうん 気持ちよかったねぇ
汚れた腐れま○こ舐められてビクビクぅーって
臭い臭い汚ま○こ食べられてイクイクぅーって
なっちゃったねぇ」
「超臭い汚汁もいっぱいかけてもらえたし
良かったねクリスちゃん」
「これで臭さも段違いにパワーアップだな
イグナイトモジュール抜剣だな」
「イヤ・・もうイヤだ・・・臭いのイヤ・・・臭いの・・・・」
ありがとうクリスちゃん！ もう一滴も出ない！
これで恥丘を穢すことなく帰ることができる！
響ちゃん 翼ちゃんにも感謝する！
ありがとう！ では さらばっ!!
はぁ
はぁ
はぁ
ピクッ
ピクッ
ドロオォ
ドロオン
ピュル
キュン
キュン
キュン
ビクン
ピッ

「なんだ？　だって・・・あのオッサン・・・」

「おっかな　誰のリンゴ」

「はあ？　今いたオッサンのリンゴだ！」

「何を言っている　リリエはずっと私たち3人しかいなかっただろう」

「そうだ　変なクリスちゃん」

「お前たち　リンゴ何言って・・・」

「それもクリスちゃん・・・面々から面白い面白こと聞いたんだよ・・・
母々面白い出ノ難ンて・・・あの」

「ああん？」

「その・・・クリスちゃん変いんだもね・・・」

「はあ？　それはもっと散々聞いたぞ
ずっと洗ってないんだからノちゃがねえだろ　洗わなくていいんだろ？」

「え？　洗ってない・・・ずっと？」

「洗ってないだと？！　バカ者！！　何を考えている？！」

「何をって・・・はあ？」

「クリスちゃんがそんな汚穢様子でなんて・・・
ちゃんとサキ脳みたいな豪相変を反逆漏ンしたらこの無事を祝って
いつも洗ってるそれにデオロ出ないらい変かったのはそのせいか」

「その様子だと深みはいた臭いは洗ってもノはらンは取れそうにないな」

「ちゃんと人様ノいら臭いになるまで結晶から出ていないでンれるかな
そんな汚事を無き散らかノて外れれると迷惑なんだもね」

「回感だ　人類の平和は私たちで守る　貴様のような汚物女は必要ない」

「な？・・・なんで・・・」

「シャ　そいつらにロンドもノンン　れもはクリスちゃん」

「？・・・

ブイ…
ギュッ

はぁ～
くっ
うむむ
ぷるっ

じとー

ドクーン
あっ
ズズズトロォォォ
ベロン

もみもみ
ハァ
ハァ
ハァ
ハァ
ハァ
モフ
ピク
ぴちゅ
くちゅ
レロレロ
ピク
ピク

ビクッ
はぁ
ぺロ
ぺロ
ぷちゅ
ぴちゅ
ぐぢゅ
ぢゅ

ピク
ヒクヒク
ビクッ
フルフル
グチョ
ビチャベロ
ヒクヒク
ビクッ

ハァ
ハァ
あっ
あぁ
ビリン
ビリン
ビリン

ビュビュッ
ビュビュッ
ビュビュビュ

ハァ
ハァ
ハァ

ブッ
ちょっ
なっ
むあぁ
じとぉ

ズーン
ズンズン
ズンズン
むぁっ
はぁ
はっ
はぁ
あぁっ

はぁ
はぁ
ピチャ
レロ
ペロォォ
チュプ
レロ
チュプ
ん、
ヒクッ
あ、
はぁ
はぁ
ピクン
あぁ

なっ
はっ
はっ
ドロ
ドロ
ドロ

あ、
ビカーン
はっ
はなす
ビクくん
ぷるん
ぷるん
ぷる

ビクンビクンビクン

ビクッ
はぁ
あぁ
あっ
ぁぁ
ビュビュビュ

ピクンッ
はぁ
はぁ
ピクンッ
はぁ
はぁ
ビクンッ
ドロオオオオ
ドロロロオ
ビクビクッ
ビクッ

Z
ハァ
ハァ
ハァ
ハァ
ビクッ
グッ
グッ

じわっ
しみしみ
もみあああ
もわ
もわ

Z
ハァ
ハァ
ハァ
くっ
ん
ブルブル
ブルブル
ブルブル

Zパスト
ビクッ
スーパーパー
スーパーパー
あっ
つるつる
んっ
あぁっ

Z
ハァ
ハァ
ハァ
ブッチョリ
ちょ
ちょ
ちょ

ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ああ
はっ
はっ
はっ
はっ
はっ
ズブッ
ズブッ
ズブッ

ハァ
ハァ
ハァ
Z
んぐっ
ジュポ
ジュポ
ジュポ
ビクン
はぁ
ん
ん
ん
あぁ
ビクッ
ビクッ

ハァ
ハァ
ハァ
ビクッ
ビクッ
ビクッ

Z
ビクッ
はっ
あ
ビクッ
ビクッ
ビクッ

Z
ビクン
ビクン
ビクン

ハァ
ハァ
ハァ
ハァ
ハァ
ハァ
ハァ
ハァ
ピクッ
ビクッ
トロォン
プシュ
ピュル
キュン
キュン
キュン
ビクン
ドロォ
ピッ

Z

Z

Z

Z

Z

Z

Z

Z

Z

Z